

非常食を食べてみたら

代田中・2 林 蓮

テレビでニュースを見ていたら、集中豪雨で川が氾濫し、家が流され、たくさんの人が避難している映像を見た。その時に一緒にテレビを見ていた母が、

「ちようど非常食の賞味期限が切れそうだし、今日一日、食べてみるか。」

と言ったので、その日は非常食を食べることになった。

「ええ、まずそうだからやだあ。」

と僕が言ったが、

「災害時に、どんな生活になるか、経験したほうがいいでしょ。」と母に諭され、食べることになった。僕のイメージでは、非常食はかんぱんや缶詰だと思っていたが、ラーメンやドライカレー、もち、チョコチップパンなどがあつた。カップラーメンやレトルトカレーは、おいしいと分かっている。だけど、非常食は保存用だから、なんとなく味が薄いイメージがあつた。また、非常食は自衛隊の人が届けてくれると思うので、家に用意しなくてよいとさえ、その時は思っていた。

朝食から非常食生活が始まった。いろいろな食べ物がある中、僕は、缶詰のチョコチップパンを食べることにした。それは、いつも朝食はパン派だからだ。缶詰を開けてみると、大きめのパンが二個入っていた。おいしそうなおいがした。僕はパンを一つ手に取り、おそろおそろ一口食べてみた。

「うまい。」

思わず声が出てしまった。パサパサしていて、しっとり感がほしいと思つたが、味はおいしかった。これならいけそうだ。

昼食は、ドライカレーともちを選んだ。朝のパンはおいしかったけれど、このカレーはおいしいだろうか。封を開けて、僕はびっくりした。米がプラスチックみたいだったからだ。さらに、作り方の説明を見て、またびっくりした。『水、六十分。お湯、十五分。』と書いてあつた。災害でガスが使えないときでもできるように、水でもできるからだ。非常食はすごいと感心した。でも、さすがに六十分も待てないので、お湯で作ることにした。お湯を線のところまで入れて、十五分待つて、中を見てみると、米の量が二倍ほどになっていた。

「これなら、量は困らないな。」

と思わず、つぶやいた。それから、粉末のカレー粉を入れて、付いていたスプーンで混ぜて食べてみると、とてもおいしかった。しかし、量が多くて食べ切ることができなかった。捨ててしまうのはもつたいないので、母に食べてもらうことにした。母は、このカレーを口に入れた瞬間、

「おいしい。具も入つてて、ごはんも軟らかくて、スパイスもきいてて飽きない味。」

と大絶賛だつた。食レポがうまいと思つた。その後、お腹いっぱいだったけれど、もちにも興味があつたので、食べることにした。きなこもちといそもちがあつて、僕はいそもちを食べることにした。作るのはとても簡単で、乾燥した硬いもちを一分、水につけるだけでできてしまった。

「あれ、醤油がない。」

入っていた袋をよく見てみると、銀色の小さい袋が出てきた。それを開けてみると、なんと醤油の匂いがある粉が入っていた。醤油が粉だなんてとてもびっくりした。ちよんちよんと醤油の粉をかけて食べてみると、少し水っぽいけれど、白玉餅みたいな感じがして、おいしかった。

「このもち、おいしいから食べてみて。」

そうめんを食べていた母に、声をかけた。

「軟らかくておいしい。粉の醤油もあるんだね。」

と母も口に入れた瞬間にびつくりしていた。こんなにおいしい食べ物を災害時に食べられるなら、食べ物には困らないと思った。

僕は災害には遭ったことはない。でも、非常食生活をしながら、以前、半日ほど停電していたことを思い出した。あの時は、電気が使えず、ワイファイが使えなくなり、ユーチューブが見られなくなったり、ゲームができなくなったりした。そのためとても暇だった。これがもし一週間や二週間も続いたら、暇でしかたがないと思った。そういえば、冷蔵庫も使えなくなり、冷凍しているアイスや冷凍食品などが溶けてしまった。その時に、冷たいものが食べられないと、こんなに苦痛なんだということが分かった。

この日の夕食。我慢ができなくて、母が作ったハンバーグを食べてしまった。それは、とてもおいしかった。食べながら、僕は非常食だけでは野菜や肉が全然とれないということに気づいた。改めて、母の作ってくれる料理がありがたいと思った。

今回の非常食生活では、災害が起きてガスが止まったり、ごはんが作れなくなってしまうときのために、自分の好みの味の非常食を準備しておくことが大切だということが分かった。これからは、毎年、夏休みに非常食の賞味期限の確認をして、切れそうだったら食べて、味に慣れるのもよいと思った。でも、毎日何事もなく、母の作ってくれるごはんを食べられることに感謝して生活していきたい。